

六朝文人伝「張華」

『晋書』張華伝

佐藤利行

張華、字は茂先、范陽方城の人である。父は平、魏の漁陽の郡守であった。華は幼くして孤児で貧しく、羊を飼つて生活していた。同郡の盧欽は、（張華を）見て彼を挙げ用いた。同郷の人である劉放もまた彼の才能をすぐれたものとし、娘をその妻にした。華は、学業は豊かで広く、文章はおだやかで美しいものであり、聡明で何にでも通じており、凶緯・方伎の書物で、詳しく見ないものはなかった。若い頃からみずからをよく謹み修め、あわただしいときにも礼を欠くことはなかった。義侠心に富み、困っている者をよく助けた。器量・見識は広く、当時の人も推測できないほどであった。

そのはじめまだ名を知られていないとき、「鷓鴣の賦」を著して、みずからに寄せて言うことには、

なんと造化は様々な形を持ち、諸々の形を万物に与えられたことか。鷓鴣のような小さな鳥でも、生と氣とをこの世に受けている。ひらひらと飛ぶ小さな体を育み、

玄や黄でその身を尊く見せたりはしない。その毛は器物に施されることはなく、肉は俎豆に登せられない。鷹や鷓も翼を傾けて過ぎてゆくだけ、まして網などどうして恐れたりしよう。草木の覆い茂っている所に、遊び集まり、高くは飛ばず、速くも飛ばない。その身をおくところはどこにでもあり、食物も手に入れやすい。林に巣くうにも一枝で足り、一食に数粒あればよい。棲みかに執着することもなく、遊んでも楽しむことはない。荆棘を卑しむことなく、芭蘭をうらやむこともない。翼を動かしてはのんびりと、足を投じては安らかに、運命に任せて道理に従い、物に煩わされることはない。この鳥は無知でありながら、身を処することは賢い。宝を抱いて害を買うことはせず、表面を飾って煩いを招いたりはない。静かにしているときにはつづまやかにして矜らず、動くときにはなるにまかせてすつきりとする。自然に任せてそれをかてにして、世の偽りに心を奪われることは

ない。

鵑うぐいすや鵑うぐいすはその背せや距きょで身を守り、鵒くわくわくや鷓せは雲の果てに去る。鷓せは奥深い所に身を隠し、孔雀くわんぐわんや翡翠ひすいは辺境の地に育つ。あの晨あしたも帰雁きえんも、また翼を矯まがげて空高く飛んで行く。これらはいずれも美しい羽と豊かな肌を持つており、ために罪も無くみな死んでゆく。蘆あしの葉をくわえて織いを避けてもそのかいもなく、ついに殺されてこの世を去る。蒼鷹そうようは猛なるがゆえにつながれ、鸚かきは知恵あるがために籠かごに入れられる。たけだけしい志を曲げて人に養われ、ただひとり九重の奥に閉じ込められ、生来の音声を変えて主人の意に順い、翼を砕いて人の役に立つとうと思う。しかし、鍾山しゅうざん・岱山たいざんの林野を恋い、隴坻りゅうていに高くそびえる松を慕い、今が幸せであるとはいえ、むかしに従容しじようたる境遇には及びもしない。海鳥の爰居えんこは海の大風を避けてやって来、條支国じょうしこくの巨爵きよくわくは嶺を踰こえてやって来る。万里の道のりを助け合いつつ、風にただよいおびえながら。そもそも体が大きければただ物の妨げになり、姿が美しければ美しいとするに足るだけである。

陰と陽とが働き合うことよって、万物それぞれを生み出した。巨大なものと微細なものとが入り交じり、様々な種類のものでできた。鷓せは蚊の睫まぶたに巢うを作り、大鵬たいほうは天の隅すみずみまで翼を垂たれる。上のものに比べると足らないし、下のものに比べると余りがある。しかし、天

地をはるかに見わたせば、私には何が大きくて何が小さいのかよく分からないのである。

陳留ちんりゅうの阮籍げんせきはこれを見て、感歎して言った、「王を輔佐するに足る人材じんざいである」と。これによってその声名が世間に知られ始めた。

郡守の鮮于嗣せんじゆは、華を推薦して太常博士とした。盧欽ろきんは華を文帝に薦め、河南の尹丞いんせうに転ずることになったが、拜命はいめいしないまま、佐著作郎ささくさくじやうに除せられた。しばらくして、長史ちやうしに遷り、中書郎ちゆうしゆじやうを兼務した。その朝議・表奏は、多く採用され、華は中書郎が本務となった。晋が禪讓を受けて、黄門侍郎わうもんじやうりやうに拜され、関内侯かんないこうに封ぜられた。

華は記憶力にすぐれており、天下のことは掌てのひらに指さすがごとくであった。武帝むてい(司馬炎しまたへん)がかつて漢の宮室制度について問ね、建章宮けんぢやうきゆうの千門万户せんもんばんかくのことに及んだとき、華は流れるようにすらすらと応対し、聴く者は倦むことを忘れた。華は地面にその図面を描き、左右の者は目をみはるばかりであった。帝は彼を非常にすぐれたものとし、当時の人々は華を子産しさんになぞらえた。数年にして中書令ちゆうしゆりやうを拜せられ、後に散騎常侍さんきじやうじを加えられた。母の死にあたり、その悲しみ痛むことは礼の度を過えるものがあつた。(帝は)手詔てしよくを下して(華を)勉励し、政務を執らせるようにした。

そのはじめ、武帝はひそかに羊祜じやうこと呉を伐つことを謀り、群臣は多く反対したが、ただ華だけはその計画に賛成した。

その後、祐は病気が重くなり、帝は華を祐のもとにつかわし、呉を伐つ計画を問ねさせた。詳しくは羊祐伝（『晋書』卷三四）にある。まさに大挙せんとするにあたり、華を度支尚書と為した。華は運漕を計算し、朝廷の作戦を決定した。晋軍は進撃したが、まだ戦果を得ずにいた。賈充らは華を誅して天下にわびることを奏上した。帝は言った、「此の度のことは私の考えでやったこと、華は私と同じである」と。時に大臣たちはみな軽々しく進攻すべきでないとしたが、華はひとりあくまでも討征を言い、必ずや成功するものと確信していた。呉が滅ぶに及び、帝は詔を下して言った。「尚書・関内侯の張華は、さきに故の太傅なる羊祐とともに大計を立案し、ついに軍事を掌り、諸々の部署を掌握し、計略をねり上げて、勝利を収めた。まことに謀をめぐらせた大勲があった。そこで華の封を進めて広武県侯と為し、一万戸を増邑し、その子一人を封じて亭侯と為し、千五百戸を与え、絹一万匹を賜うことにする」。

華の名は一世に重んぜられ、みな推服する所となった。晋史および儀礼・憲章はいずれも華の手にゆだねられ、添削するものが多くあった。当時の詔誥は、すべて華の草定したもので、その名声はいよいよ高くなり、台輔（三公）の望みを持たれた。

ところで、荀勗は大族なるをもって帝の恩寵をたのみ、華をにくんでいた。いつもすきをうかがっては、華を外鎮

に出そうと考えていた。たまたま帝が華に「誰に後事を託せばよからうか」と問ねたとき、華は「明德 至親なることは、齊王攸に及ぶお方はおりません」と答えた。それは帝の思いとは違っていたので、帝意に逆らうものとして、非難をあげた。そこで華を出だして持節・都督幽州諸軍事・領護烏桓校尉・安北將軍とした。（華は）新旧となく撫循したので、戎も夏（中国）も華になついた。東夷の馬韓や新彌の諸国は山に依り海を帯び、幽州を去ること四千里余り、歴代、中国に従わざる二十数か国は、いずれも使者を遣わして朝献した。こうして遠方の夷狄も方物を献上して服従し、四境は心配がなくなった。穀物はよく実り、兵士や馬は強く盛んになった。

朝議で華を徴して宰相とし、また号を進めて儀同としようとした。そのはじめ、華は徴士の馮恢を帝にそしつたことがあった。統は恢の弟であったが、帝にとても可愛がってもらっていた。統がかつて帝のそばに侍っているとき、従容として魏・晋の事を論じ、「わたくしひそかに思いますが、鍾会のあやまちは、太祖によるものであります」と言った。帝は顔色を変えて言った、「そなたは何を言っているのか」。統は冠をぬいで謝して言った、「わたくしはみだりにでたらめを言いました。この罪は死に当たります。しかしわたくしには、やはり申し上げなくてはならないことがございます」と。帝は「どうしてこのようなことを言

うのか」と言った。紂は言った、「わたくし思いますに、よく御する者は、必ず六本のたづなろくほんのたづなの伸縮の具合をよく知っているし、よく政治をなす者は、必ず官吏としての方法ほうほうや引きめぐらし方をよく知っているものです。ゆえに仲由は勝気であるためにおさえられ、冉有は内気であるために推し進められたのです。漢の高祖の八王は寵愛がすぎたために滅ぼされ、光武帝の諸将はよく身を抑えたために終りをよくしました。これらのことは、上に仁・暴のちがいがあり、下に愚・智のちがいがあるのではなく、それは抑揚・与奪がそのようにさせているだけなのです。鍾会の才には限りがありましたのに、太祖はそれを過大に評価し、その謀りごとをよしとし、爵号と車服を盛んにしました。重い権勢を与え、大軍を委ねました。ために会にみずから失計は無くても、功績は賞してもらえないとおもわせることになり、思うままに権力を振わせ、ついに反逆を画てさせてしまったのです。さきに太祖をして、その取るに足らぬ才能に気づかせ、大礼をもつて節制し、権勢を抑えつけ、規則を守らせたならば、乱心は生ずること無く、乱事は成ることは無かったでしょう。帝は「その通りである」と言った。紂は稽首して言った、「陛下がすでに私の言葉をお認めになるのであれば、どうか堅氷のきざしをよくよくお考えになり、会のごときやからをして再び覆敗を致さしむることのなきように」と。帝が「いま、会のごとき者がい

るであろうか」と言うと、紂は「東方朔は「談論はどうして容易であろう」と言い、「易」には「臣下が言語を慎重周密にしなれば、その身を滅ぼしてしまふ」とあります」と言った。帝はそこで左右の者をしりぞけて言った、「どうか存分に言つて下され」。紂は「陛下は謀をめぐらせた臣下として、大功は天下にあらわれ、海内で知らぬものはおりません。方鎮に拠つて兵馬の任務を統括したのは、すべて陛下の御聖慮によるものです」と言った。帝は黙っていた。しばらくして華を徴して太常とした。太廟の屋棟がこわれたことで、華は官を罷免された。そのまま武帝の世が終わるまで、列侯として朝見した。

惠帝が即位すると、華を太子少傅とした。張華は、王戎・裴楷・和嶠らとともに徳望あるをもつて、楊駿にいらまされていたので、みな朝政には関与しなかつた。楊駿が誅されてのち、皇太后を廃せんとして、群臣を朝堂に集めた。議論する者はみな天子の意図を察して、「春秋」には文姜を絶つております。今、太后はみずから宗廟に絶たれました。やはりまた廢黜すべきでありましょう」とした。ただ張華だけは、「夫婦の道は、父でさえも子にそれを求めることはできないし、子も父にそれを求めることはできない。皇太后は罪を先帝に得た者ではない。今もしその親であるものを、聖世の母ではないとするならば、漢に趙太后を廢して孝成后とした故事によつて、太后の号を貶して、

武皇后と称し、別の宮殿に住ませ、そうして貴位のまま終わらせるべきである」とした。この華の意見は聴き入れられず、ついに太后を廢して庶人とした。

楚王瑋は密詔を受けて、太宰の汝南王亮・太保の衛璠らに殺した。国内外の兵は擾乱し、朝廷は大いに恐れたが、なすすべもなかつた。華は帝に言った、「瑋は詔をいつわつて、擅に二公を殺しました。将士はわけもわからないまま、偽詔を国家の意と思い、それに従つただけなのです。今すぐ驍虞の幡を遣わして外軍を解散させるべきです。そうすれば、きつとすぐに治まるでしょう」。帝はこれに従い、瑋の軍は果たせるかな敗れた。瑋の誅せらるるに及び、華は首謀なる者として功があつたということで、右光祿大夫・開府儀同三司・侍中・中書監に拜され、金章紫綬を授けられたが、固く開府を辭退した。

賈謐は后と共謀して、華は庶人であつて、すぐれた儒者で策略にたけており、進んでは上に逼るのを嫌うこと無く、退いては衆望の依る所であり、朝綱に倚り、政事を訪ねる人物であると考えた。まよつてよくわからないので、裴頠に問ねた。頠はもとより華を重んじていたので、その事に口添えした。かくて華は、忠を尽くして国政を助け、欠けたるところを補つた。閻主虐后の朝にありながら、国内が平安であつたのは、華の功績である。華は賈后の一族の隆盛を心配して、「女史の箴」を作つてそれを風刺した。賈

后は凶暴で嫉妬深かつたが、華にはいちもく置いていた。久しくして、これまでの忠勲を論じて、封を壮武郡公に進めた。華は十数回にわたり辭退したが、手詔をもつてあつくさとされたので、ついにそれを受けた。数年にして、下邳王晃に代わつて司空となり、著作を領した。

賈后が太子を廢しようとするにいたつて、ときに左衛率の劉卞は甚だ太子に信任されており、宴会があるたびに、卞は必ず同席していた。賈謐の驕傲ぶりをしばしば目にし、太子はその恨みを言動にあらわしたが、謐の方もおとなしくはしなかつた。卞は賈后の策謀のことを華に相談したが、華は「聞きたくない」と言つた。卞は言つた。「わたくし卞は、貧しくやつれた身でありながら、須昌の小吏からあなたを抜擢によつて、今日に至つております。士は己を知る者のために感ずるもの、このようにならなければ、くしたのに、あなたはまだこの下をお疑いなのか」。華は「もしかりにそのようなことがあるとして、あなたはどうしようというのか」と言つた。卞は言つた、「東宮の俊才は林のごとくおり、四方に万人の精兵を率いております。あなたは宰相の任にあられます。もしあなたの命を得たならば、皇太子は入朝して尚書の事を録し、賈后を金墉城に廢することは、両黄門の力だけで十分です」。華は言つた、「今、天子はその正位に即き、太子とて人の子。私は宰相の命を受けてもおらない。それなのに今このようなことを

するのには、それはその君父を無きものにして、不孝を天下に示すことになる。うまくいったとしても、罪を免れることはできない。まして権力を持った外戚が朝廷に満ちあふれ、威権が一つでないこのときに、平安にすることができようか」。

帝が群臣を式乾殿に集め、太子の手書を取り出して、あまなく群臣に示したところ、誰も何も言わなかった。ただ華だけは諫めて言った、「これは国の大禍であります。漢の武帝よりこのかた、正嫡を廢黜するたびに、いつも喪乱をきたしました。その上、わが晋国は天下を有していまだ日も浅いことであり、願わくは陛下、よくよくお調べになられんことを」と。尚書左僕射の裴頴は、まず手書を持ってきた者を取り調べ、その上で太子の手書を調査すべきであり、そうしなければ、恐らく詐妄があると思われるとした。賈后はそこで太子の普段の啓事十数紙を取り出した。みんなはそれを比べてみたが、あえてちがうと言うものもいかなかった。議論は日が西に傾くころになっても、決着がつかなかった。賈后は、華たちの決意の堅いことを知り、太子を廢して庶人となさんことを上表して願ひ出たので、帝もそこでそれをゆるした。

そのはじめ、趙王倫は鎮西將軍となり、関中を撓乱し、氏・羌は謀反した。そこで、梁王彤を倫に代えた。或る者が華に言った、「趙王は貪昧であつて、孫秀を信用し、所

所で乱を為しました。しかも秀は変詐にして、姦人の雄であります。今すぐ梁王に秀を斬らせ、趙の半ばを刈つて、関右に謝罪することが、よろしいのではありませんか」と。華はこれに従い、彤も許諾した。秀の友人の辛冉が西方からやつて来て、彤に言うことには、「氏・羌はみずから謀反したのであつて、秀のためではありません」と。ために死罪は免れた。倫は帰還すると、賈后にへつらい、録尚書事となることを求め、後にまた尚書令を求めた。華と裴頴はあくまで反対したので、怨みをかうことになり、倫と秀は華を讐のように憎んだ。

武庫が火事になった。華はこれをきつかけに変事の起こらんことを恐れ、兵を配して守備を固め、そうしてから火事を救った。ために累代の宝物や漢の高祖の斬蛇の劍・王莽の頭・孔子の履などが、ことごとく焼失した。時に華は、劍が屋根を突き破つて飛んでゆくのを見たが、どこに行くのかわからなかった。

はじめ、華が封ぜられた壮武郡では、桑が変化して柏となるということがあつたが、識者はこれを不祥であるとした。また華の役宅や官舎に、しばしば妖怪が出た。息子の躋は、中台星の裂けたことをもつて、華に位を遜ることを勧めた。華はその勧めには従わず、「天道は玄遠なるもの、ただただ徳を修めてそれに応ずるまで。静肅にして天命を待つのがよい」と言った。倫・秀は賈后を廢せんとして、

秀は司馬雅を使わして、夜、華に言うことには「今や社稷は危険な状態、趙王はあなたと共に朝廷を正し、覇者の事をなそうと思われておられます」と。華は、秀らが必ずや篡奪をなすであろうことを知り、これを拒否した。雅は怒って言った、「刃が首に振り下ろされようとしているときに、こんなことを言うとは」。ふり返ることもなく退出していった。

華は昼寝をしていたとき、たちまちに屋根が壊れ落ちる夢を見て、目覚めてそのことを気味悪がった。その夜、災難がふりかかったのである。いつわって詔と称して華を召し出し、ついに裴頴とともに捕らえられた。華は死に臨み、張林に向かつて言った、「そなたは忠臣を殺そうとするのか」。林は詔を称して華をせめて言った、「あなたこそ宰相として、天下の事を任としながら、太子が廃せられたとき、節義を全うして殉死しなかつたのはどうしてか」。華は言った「式乾の議については、わたくしの諫言はすべてとつてある。諫めなかつたわけではない」と。林は言った「諫言が容れられなかつたのに、どうして宰相の位を去らなかつたのか」。華は返答することができなかつた。しばらくして、使者がやって来て言った「詔によって、あなたを斬る」と。華は言った「わたしは先帝からの老臣として、丹心を尽くしてきた。わたしは死を惜しむのではない。王室の禍難の、この上ないことを恐れるだけなのだ」と。ついに華を前殿

の馬道の南で処刑し、三族は皆殺しになった。朝廷の者も人民も、悲しみ痛まない者はなかつた。時に六十九歳であつた。

華は生来、人物を好み、推薦しては倦むことがなかつた。貧窮下賤の士で門前に伺候する者に至つては、一介の善き者がいれば、すぐに嘆息称歎し、その人のために力添えをしてやつた。もとより書籍を愛し、亡くなった時には、家に余財は無く、ただ書物が机や本箱に溢れるほどであつた。かつて引越しをするのに、書物を二十台の車に載せたほどであつた。秘書監の撃虜は官書を撰定するのに、すべて華の書籍によつて校定した。天下の奇書で、世の中にめつたにないものは、すべて華の所にはあつた。これにより博物洽聞は、世に比類なきものがあつた。

恵帝のとき、鳥の毛で三丈もの長さのものを見つけた者がいて、それを華に見せた。華はそれを見るや、心配そうに言った、「これは海鳧毛というものである。これが現れたときには天下は乱れてしまう」と。

陸機がかつて華に鮓をおくつた。その時、賓客でいっばいであつた。華は器を開けるや「これは龍の肉である」と言った。一座の人はこれを信じなかつたが、華は言った「ためしに苦酒でこれを濯いでみよ、きつと何かがあるであろう」と。しばらくして五色の光が起こつた。機は帰って鮓をくれた者に問ねたところ、「園中の茅を積んである下で

一匹の白魚をつかまえました。格好が変わっているのです、それで鮓を作ったところ、とても美味しかったので、献上した次第です」ということであつた。

武庫は非常に緊密に封閉してあつたが、その中に忽然と雉が現れて鳴いた。華は「これはきつと蛇が雉に化けているのであろう」と言つた。武庫を開いてみると、果たせるかな雉のそばに蛇の蛻があつた。

呉郡の臨平の岸が崩れ、一つの石鼓が出てきたが、これをたたいても音が出ない。帝が華に問ねると、華は言つた「蜀の桐材を取つて、魚の形に刻み、それで打てば鳴るでしょう」と。そこでその通りにすると、果たしてその音は数里先までも聞こえた。

初め、呉がまだ滅びていないとき、斗牛の間にも紫気が上つた。道術者はみな呉の勢力は強く盛んであるので、まだ呉を討つべきではないとした。しかし華だけは、そうではないとした。呉が平定されてから、紫気はいよいよ明らかになつた。華は、豫章の人で雷煥という者が緯象によく通じているということ聞き、そこで煥を宿まらせて、人をしりぞけて言つた「いっしょに天文を尋ねて、将来の吉凶を知ろう」と。そこで樓に登つて仰ぎ観た。煥は「私はずいぶん観察しましたが、ただ斗牛の間にいささか異気がございます」と言つた。華が「それは何の祥か」と言う

と云う。華は言つた「君の言う通りだ。私が若い頃、人相見が言うことには、六十歳を過ぎて、地位は三公に登り、宝剣を手に入れて腰に帯びるであらうと。この予言とよく似てはいないか」と。そこで問ねて言つた「どこの郡にあるのか」。煥は「豫章の豊城にあります」と言つた。華は言つた「君に幸となつてもらつて、ひそかに力を合わせて捜し出そうと思うのだが、よかろうか」と。煥はそれを承諾した。華は大いに喜びすぐさま煥を豊城の令とした。煥は県に到着すると、獄舎の下を掘り、四丈余りの深さのところ、一つの石函を見つけた。それは非常に光りかがやいており、中には二本の剣があり、一つには龍泉、一つには太阿と銘が刻んであつた。その日の夜、斗牛の間の気は見えなくなつてしまつた。煥が南昌の西山の北巖の下で土で剣を拭つたところ、その輝きはいよいよ艶やかになつた。大きな盆に水をはり、剣をその上に置くと、これを見る者は、輝きに目も眩むばかりであつた。使者を遣わして一本の剣と土とを華に送り、もう一本は置いて自分が佩びた。ある者が煥に「二本を手に入れておきながら一本だけを送つて、どうして張公を欺けようか」と言つた。煥は言つた「本朝はまさに乱れんとしており、張公はその禍いを受けようとしている。この剣は徐君の墓樹に繫けられるべきものである。霊異の物は、結局は化して去り、永く人のために佩服されることはないであらう」と。華は剣を

得るや、大切に、つねに坐側に置いた。華は南昌の土は華陰の赤土には及ばないと思ひ、煥に手紙を送つて言うことには、「劍文を詳しくみるに、これは干将である。莫邪はどうしてやつてこないのか。そうはいつても、天生の神物であるから、終わりに合するであろう」と言った。そこで華陰の土一斤を煥に送った。煥は更めてその土で劍を拭いたところ、いよいよその輝きを増した。華が誅せられて、劍の所在はわからなくなった。雷煥は卒し、その子の雷華が州の従事となり、劍を持って出かけ延平津を通りかかったところ、劍は忽ちに腰から躍り出て水の中に落ちてしまった。人に水にもぐらせて取ろうとしたが、劍はみづからず、ただそれぞれ数丈の長さの二匹の龍が、とぐろを巻いて文を為しているのが見えるだけで、水にもぐった者は、おどろいて返ってしまった。ほどなくして光彩が水を照らし、波浪がわき立ち、とうとう劍を失ってしまった。雷華は歎息して言った、「先君が化去の言、張公が終合の論、此れがその験であろうか」と。張華の博物でこの類のものは多く、詳述することはできない。

後に、倫・秀が誅せられて、齊王罔が輔政した。摯虞は箋を罔に送つて言った、「このごろ張華が亡くなつてから、中書省に入つてみたところ、先帝の時に詔に答えた張華の草稿を見つけました。先帝は華に、政を輔け重任を果たし、後事を託すべき人物を問ねておられますが、華は「明德至

親は、先王に及ぶものはありません。先王を留めて社稷の鎮となさるのがよろしいでしょう」と答えております。その忠良なる謀、款誠なる言葉は、死後に信あり、没して後に明らかなるものです。かりそめに時勢に随う者と世を同じくして論ずることはできません。しかるに議する者の中には、華を責めるのに愍懐太子の事を持ち出し、節を抗して廷争しなかつたとするものがおります。このような時には、諫める者は、必ず違命の死を得るものなのです。先聖の教えに「死して益無き者は、以て人を責めず」とあります。ゆえに晏嬰は、齊の正卿であつて、崔杼の難に死ぬことはなく、季札は呉の宗臣でありながら、逆順の理を争いませんでした。理が尽きて施す所の無い者は、本當に聖教の責めない所であります。そこで罔は、奏して次のように言った、「わたくしはこのように聞いております、微えたものを興し、絶えたものを継ぐのは、聖王の高政であり、悪を貶め善を嘉するのは、「春秋」の美義であると。こういうわけで、武王は比干の墓を封じ、商容の間を表したのです。まことに幽界と明界とが、相い通じたものであります。孫秀は逆乱した際に、佐命の国を滅ぼし、骨鯁の臣を誅殺し、王室を絶滅し、その残虐をほしのままにし、功臣の後裔は多く滅ぼされました。張華・裴頠は、それぞれ憚られたために時に誅せられ、解系・解結は、ともに節儉であつたために並びに害され、歐陽建らは罪無くして死にま

した。人民はこれを憐れんでおります。今、陛下は日月の光をあらため、維新の命を布かれました。しかるに、これらの諸人はまだその恩理を蒙っておりません。昔、樂・卻は卑隸に降りましたが、「春秋」はその人を伝えております。また、幽王は功臣の後継ぎを絶ち、賢者の子孫を棄てましたが、詩人はそれを刺っており、わたくしは高職を忝くするもの、愚誠の納れられんことを願っております。もし御聖意に合いましたならば、群臣に命じて議論させて下さいますように」。議論した者はそれぞれに意見があつたが、多くの者がその冤罪を称えた。杜武国の臣の竺道は、また長沙王のもとに出向き、張華の爵位の復活を求めたが、長らくどつちつかずのままであつた。

太安二年、詔があつた。「そもそも愛することと悪むことが攻め合い、佞と邪が正しきを醜むことは、古えより有ることである。故の司空、壮武公の華は、その忠貞をつくして、朝廷を翼けんことを思っており、謀護の勲功は、事あるごとにこれに頼っていた。さきには、華に輔弼の功あるをもつて、封建されるべきであつたのに、華は固く辞退すること八・九たびに至り、深く大制のしかるべきではないことを陳べた。結局、危急存亡の慮いが有るときも、その辞義は誠をつくし、遠近に勧むるに足るものであつた。華の至心は、神明に誓われたものである。華は、呉を伐つた勲功によつて、先帝より爵位を受けていた。これを今と

なつて封じたのでは、国体に合わないうえに、また小功を以てさきの大賞に躓えさせることもできない。華が害せられたのは、姦逆が乱を凶つたために、濫りに賊害されたのである。華に侍中・中書監・司空・公・広武侯および没収した財物と印綬・符策を復し、使いを遣わして弔祭せよ」と。

そのはじめ、陸機兄弟は、志気は高爽にして、呉の名家たるを自負していた。初めて洛に入るや、中国の人士に推ることなく、張華を見るや旧知の者のごとくであつた。華の徳ある行いに、師の礼をもつて欽しみ敬つた。華が誅せられて後、その誄を作り、さらに「詠徳の賦」を作つて、その死を悼んだ。

華は「博物志」十篇を著し、その文章とともに世に行われた。禕・韙の二子があつた。

禕は字を彦仲といい、学問を好んだ。謙虚で慎み深く、父の気風を受け継ぎ、散騎常侍となつた。韙は、儒学を博く修め、天文に暁く、散騎侍郎となつた。二人とも時を同じくして害にあつた。禕の子の輿は、字を公安といい、華の爵を嗣いだ。難を避けて江を渡り、丞相の掾・太子舍人に辟された。

注

- 1 范陽方城——范陽郡方城縣。今の河北省涿県。
- 2 盧欽——盧毓（「魏志」卷二二）の子。字は子若。
- 3 劉放——「魏志」卷一四。
- 4 函緯方伎——「函緯」とは、河函と緯書。「方伎」とは、
 医術や占星術など。
- 5 造次必以礼度——「造次」とは、倉卒なこと。「論語」
 里仁篇の「造次にも必ず是に於てし、顛沛にも必ず是
 に於てす」にもとづく。「世説新語」排調篇注に引く
 「文士伝」に、「華は人と為り 威儀少なく、姿態多
 し」と。
- 6 篤於周急——困窮している人を手厚く援助することをい
 う。「論語」雍也篇に「君子は急を周ひて富めるに繼
 かず」とある。
- 7 器識弘曠、時人罕能測之——「世説新語」品藻篇に「劉
 令言、始めて洛に入り、諸名士を見て歎じて曰く、張
 茂先は我が解せざる所なり」と。
- 8 初未知名、著鷓鴣賦——「鷓鴣の賦」は「文選」卷二三
 に収められており、その注に引く臧榮緒「晋書」には
 「雲閣に棲処すと雖も、慨然として感あり、鷓鴣の賦
 を作る」とある。
- 9 摂生而受氣——「摂生」は「老子」第五十章に「善く生
 を摂する者は、陸に行きて兕虎に遇はず、軍に入りて
- 10 甲兵を被ず」とある。「受氣」は「莊子」秋水篇に「北
 海若曰く、吾は形を天地に比ねて、氣を陰陽に受く」
 とある。
- 11 毛無施器用、肉不登乎俎味——「左氏伝」隱公五年に「鳥
 獸の肉、俎に登らず、皮革・齒牙・骨肉・毛羽、器に登
 らず」と。
- 12 翳蒼蒙籠——草木の密生しているさま。「孫子」行軍に
 「林木翳蒼し、草樹蒙籠たり」と。
- 13 巢林不過一枝——「莊子」逍遙遊篇に「鷓鴣は深林に巢
 ぐうも、一枝に過ぎず」と。
- 14 不懷宝以賈害——「左氏伝」桓公十年に「初め虞叔に宝
 有り。虞公 柎を求むるも、献ぜず。既にして之を悔
 いて曰く、周の諺に之れ有り、匹夫 罪無し、璧を懷
 くは其れ罪なりと。吾 焉ぞ此れを用ひて、其れ以て
 害を賈はんやと。乃ち之を献ず」とある。
- 15 海鳥爰居——「国語」魯語上に「海鳥を爰居と曰ふ。魯
 の東門の外に出ること三日なり」と。
- 16 條支——漢代、西域の国の名。
- 17 鷓鴣巢於蚊睫——「列子」湯問篇に「江浦の間に麼虫を
 生ず。其の名を焦螟と曰ふ。群飛して蚊の睫に集まる
 も、相ひ触れず。棲宿し去来するも、蚊は覺らず」と。
 大鵬彌乎天隅——「莊子」逍遙遊篇に「北冥に魚有り、
 其の名を鯤と為す。鯤の大いなる、其の幾千里なるか

- を知らず。化して鳥と為る。其の名を鵬ほうと為す。鵬の背、其の幾千里なるかを知らず。怒どして飛べば、其の翼は垂天の雲の若し」と。
- 18 王佐之才―王者を輔佐するに足る才能のある人。「芸文類聚」卷五六に引く「王隱晋書」には、「阮籍、華の鷦鷯せうりょうの賦を見て以て王佐の才と為す。中書郎成公綏せいこうすいも亦た華の文義は己に勝ると推す」とある。
- 19 扈黃門侍郎―「北堂書鈔」卷五八に引く「王隱晋書」に、「秦始三年、詔して張華を黃門侍郎と為す」と。
- 20 武帝嘗問―「世説新語」言語篇注に引く「晋陽秋」に、「華は博覽洽聞にして、貫綜せざる無し。世祖嘗て漢の事を問ひ、建章の千門万戸に及ぶ。華は地に画きて図を成し、応対すること流るるが如く、張安世も過ぐる能はざるなり」と。
- 21 子産―春秋時代、鄭の大夫の公孫僑のこと。「子産」は、その字。
- 22 賓服―やうて来てしたがう。「礼記」樂記に「暴民作らず、諸侯 賓服す」と。
- 23 徴士馮恢―「徴士」とは、朝廷から招かれながら、官職に就かない人。「馮恢」は、馮統（「晋書」卷三九）の兄。
- 24 鍾会―三国、魏の人。字は士季。鄧艾・諸葛緒とともに蜀を討平するも、異志を抱いて謀反を起こした。「魏志」卷二八。
- 25 六轡―六頭だての馬車につけたたづな。「列子」湯問篇に「趣こくこと吾の如くにして、然る後に六轡ろくじ持す可く、六馬御す可し」とある。
- 26 官方―官吏として、その職務を掌るための方法。「左氏伝」昭公二十九年に「夫れ物は物ごとに其の官有り。官ごとに其の方を修めて、朝夕に之を思ふ」と。
- 27 控帶―ひきめぐらす。任昉の「范尚書の為に吏部封侯を讓る第一表」に「兼ぬるに東卓とうたくの數畝、朝夕を控帶し、関外の一區、鍾阜しゆふを悵望することを以てす」と。
- 28 仲由以兼人被抑―「論語」先進篇に「由や人を兼ぬ。故に之を退く」と。
- 29 冉求以退弱被進―同じく「論語」先進篇に「求や退く。故に之を進む」と。
- 30 漢高―漢の高祖、劉邦のこと。
- 31 光武―後漢の光武帝、劉秀のこと。
- 32 名器―爵号と車服。「左氏伝」成公二年に「仲尼之を聞きて曰く、惜しいかな。多く之に邑を与ふるに如かず。唯だ器と名とは以て人に仮す可からず」と。
- 33 堅氷―何事も些細なことから大事に至るといふこと。「易」坤卦に「初六、霜を履ふみて堅氷至る」と。
- 34 談何容易―「漢書」東方朔伝に「於戲、可ならんや、可ならんや。談 何ぞ容易ならん」とある。

- 35 臣不密則失身——「易」繫辭伝上に「君 密ならざれば則ち臣を失ひ、臣 密ならざれば則ち身を失ふ」と。
- 36 方鎮——軍事をつかさどり地方を鎮守する人の駐在地。
- 37 春秋絶文姜——「左氏伝」莊公元年に「姜氏と称せざるは、絶ちて親と為さざるなり」と。
- 38 趙太后——成帝の寵妃であつた趙飛燕のこと。「漢書」孝成趙皇后伝に「皇太后を貶して孝成皇后と無し、居を北宮に徙す」とある。
- 39 騶虞——騶虞（瑞獣の名）を描いた旗。軍隊を解散するとき用いた。
- 40 彌縫——「左氏伝」僖公二十六年に「其の闕を彌縫して、其の災ひを匡救す」と。
- 41 知己——「史記」刺客列伝に「士は己を知る者の為に死す」とある。
- 42 阿衡——殷のときの宰相をいう。転じて、ひろく宰相の意に用いる。
- 43 太子手書——これは賈后が太子に酒を飲ませて書かせた反逆の手紙。潘岳が草稿を書いた。「晋書」卷五三、愍懷太子伝に「陛下宜自了、不自了、吾当入了之。云云」で始まる其の時の手書が載せてある。
- 44 趙王倫——「晋書」卷五九。
- 45 梁王彤——「晋書」卷三八。
- 46 武庫——漢代の倉の名。武器に限らず諸々の宝物が収納
- 47 されていた。
- 47 漢高斬蛇劍——漢の高祖が、ある夜酒に酔つて、白帝（秦が祀つていた神）の化身である蛇を斬つた。その時の劍をいうのであろう。「史記」卷八、高祖本紀。
- 48 王莽頭——「漢書」卷九九下、王莽伝に「莽の首を伝へて更始に詣らしめ、宛の市に懸く。百姓は共に之を提撃し、或るものは其の舌を切りて食ふ」とある。或いは、この時の頭が残されていたのであろうか。
- 49 孔子履——「履」は、はきもの。
- 50 尽焚焉——「晋書」卷四六、劉頌伝には「武子の火に及び、彪（頌の弟）は計を建てて屋を断ち、諸々の宝器を出だすを得たり」とあり、この記述と食い違つて
- 51 いる。
- 51 式乾之議——惠帝が式乾殿に群臣を集め、愍懷太子を廃することを議論したことをいう。
- 52 夷三族——「晋書」卷四六、劉頌伝に「趙王倫の張華を害するに及ぶや、頌は之を哭して甚だ慟けり。華の子の逃るるを得たるを聞くや、喜びて曰く、茂先、卿は尚ほ種有るなり」とあり、張華の子が害を免れたことが、記されている。「晋書」に名が見えるのは、「禕・韙」の二子だけである。
- 53 摯虞——「晋書」卷五一。
- 54 博物洽聞、世無与比——「魏志」卷二二、盧毓伝注に引

- く「晋諸公贊」に「張華は、博識 多聞にして、物として知らざるは無し」と。
- 55 苦酒—醋のこと。
- 56 斗牛—二十八宿の斗宿と牛宿。
- 57 雷煥—「太平御覽」卷三四三に引く「雷煥別伝」に「雷煥、字は孔章、鄱陽の人なり。星曆卜占を善くす、云云」と。
- 58 徐君墓樹—延陵の季札は上国に使いして徐に立ち寄つた時、徐の君が札の剣を欲しがっているのを知つて、上国へ使ひしての帰途、剣を献上しようとしたが、徐君がすでに亡くなっていたので、剣を其の冢の樹に懸けて初志を遂げた（「史記」呉太伯世家）。
- 59 華得劍、宝愛之—「劍宝」二字、和刻本は互倒して「宝劍」に作る。「華は宝剑を得るや、之を愛し」。
- 60 華陰—今の陝西省潼関県の西にある華山の北。
- 61 干将・莫邪—干将は刀匠の名で、莫邪はその妻の名。二人で協力して陰陽二本の剣を作り、陽を干将、陰を莫邪といった。「太平御覽」卷三四三に引く「列士伝」に「干将・莫邪は、晋君の為に剣を作り、三年にして成る。剣に雌雄有り、天下の名器なり」とある。
- 62 華—「雷煥別伝」では「爽」に作る。
- 63 先君化去之言—雷煥が「靈異之物、終当化去」と言つたことを指す。
- 64 張公終合之論—張華が「天生神物、終当合耳」と言つたことを指す。
- 65 先王—齊王攸を指す。
- 66 晏嬰—春秋時代、齊の崔杼が莊公を弑し、公室に与る者七人を次々に殺し、いよいよ晏子に迫つたとき、晏子は臣節を全うして白刃にも志を降すことはなかつた。「晏子春秋」内篇・雜上。
- 67 季札—「史記」呉太伯世家に「呉人、固く季札を立てんとするも、季札は其の室を棄てて耕す。乃ち之を舍く」とある。
- 68 罔於是奏曰—罔の此の上奏文は、「晋書」卷六〇、解系伝にも載せてある。
- 69 武王封比干之墓、表商容之間—「尚書」武成に「箕子の囚を釈し、比干の墓を封じ、商容の間に式す」と。
- 70 骨鯁之臣—剛直直諫の臣。
- 71 解系・解結—「晋書」卷六〇。
- 72 羔羊—「毛詩」召南・羔羊の詩序に「召南の国、文王の政に化し、在位 皆な節儉正直にして、徳は羔羊の如きなり」と。
- 73 歐陽建—「晋書」卷三三。
- 74 欒郤降在阜隸—「春秋左氏伝」昭公三年に「欒・郤・胥・原・狐・續・慶・伯、降りて阜隸に在り」と。欒・郤などの名家が没落し、奴隸のごとくになったこと

をいう。

75 其人―「人」字、「張華伝」は「違」に作るが、今は「解系伝」に拠る。

76 右職―此の二字、「張華伝」は「在職」に作るが、今は「解系伝」に拠る。

77 見華一面如旧―「晋書」卷五四、陸機伝には、「太康の末に至り、弟の雲と俱に洛に入る。太常の張華に造る。華は素より其の名を重んじ、旧より相ひ識るが如し。曰く、呉を伐つ役、利は二俊を獲たり」とある。

78 二子禕躋―張華には娘もあつたらしく、「晋書」卷七〇、卞壺伝に「張華の誅せらるるや、粹（壺の父）は華の婿なるを以て、官を免ぜらる」とあることから、華の娘は卞壺の父の卞粹に嫁いでいたと思われる。

79 同時遇害―注52を参照。それによれば、華の子は害を免れたことになっている。或いは「禕・躋」の外にも、子があつたのか。別腹の子かもしれない。